

Abstract

序論——安全保障理論の新たな地平

赤木 完爾（慶應義塾大学法学部教授）

我が国では国際安全保障分野の研究において、理論を自覚して適用した研究は必ずしも多くない。また学界のみならず、一般の議論においては、さらにそうした傾向が際立っている。当学会の機関誌『国際安全保障』第29巻第1号（2001年6月）から第44巻第3号（2016年12月）までに掲載された論考は382点であるが、それらを調査した結果においても、理論を適用した研究は圧倒的に少ないことが判明した。

本特集では、理論研究と歴史研究の差異と、両者が相互に連携する必要性を指摘した後、安全保障研究分野における理論を用いた研究の一層の強化を提案した。そしてその例示として最近の理論研究の動向とネットワーク理論および複雑系理論の安全保障研究への適用、第一次世界大戦の勃発をめぐる歴史研究と理論研究の相互作用、合理選択論による日米同盟のダイナミズムの検討、進化心理学によるネオクラシカル・リアリズム理論の強化とその日本外交史への適用をそれぞれ検討した。

『国際安全保障』第44巻第4号（2017年3月）1—7 ページ。